



TITLE:

經濟道と經濟術(五)

AUTHOR(S):

作田, 莊一

CITATION:

作田, 莊一. 經濟道と經濟術(五). 經濟論叢 1922, 15(2): 195-204

ISSUE DATE:

1922-08-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127933>

RIGHT:

京都市大學經濟學會 經濟論叢

第五十卷 第二號

大正十一年八月一日發行

論叢

交通税の捕捉すべき給付能力

法學博士 神戸 正雄

支那の古典に見はれたる社會政策

法學博士 田島 錦治

經濟道と經濟術

法學士 作田 莊一

小作制と小作法

法學博士 河田 嗣郎

時論

支那の改造と國際管理

法學博士 末廣 重雄

戸數割を論ず

法學博士 小川 郷太郎

物價問題私論

法學博士 山本 美越乃

說苑

ジョン・ロックの私有權論

經濟學士 岩城 忠一

雜錄

經濟學の革命

法學博士 河上 肇

大學生の一年間の學費

經濟學士 藤野 靖

經濟道と經濟術（五）

作 田 莊 一

五、普遍道德

其二 道德上の判定

人々は善價値を實現せんが爲めに種々の我性の下に種々の意志發動を試むる。然らば如何なる我性及び意志が果して善なりと判定され得るか。此問題を解かんとするには當然に善とは何ぞやと云ふ根本問題に觸れて來るが、今、斯かる最高の哲學問題に立入ることは徒らに問題を紛糾せしむる結果ともなり又余の分際としては遠慮して置きたい。茲では簡單に、善とは我等の生活中、意志實現の方面に於て我等が據る所の價値判定の標準であると云ふに止めたい。

如何なる心意が善であり又は惡であるかの問題に對しては是まで二様の答案がある。其一は善を正價値となし惡を反價値と見るものであり、其二は善のみを價値と見て惡は善の缺乏なりと見るものである。吾人は此の後者に與みする。吾人は要約して下の如く言ふ。先きに擧げたる道德的判定の對象は凡て善であるが、唯だ善價値の階段に於て優劣の差別があるのみと。以下吾人は然る所以を道德心の發達に由つて説明しようと思ふ。

I 道德心の發達階段。

靈と肉との矛盾に悩む者は靈肉合致の第三王國に赴いて此の苦患より脱れんことを希求する。されど精密に謂へば、我等は靈肉の矛盾に苦しむ以前に於て先づ靈肉未分の第一王國に住み、終に靈肉融合の第四王國に向ふのであつて、其間に矛盾せる二つの王國が我等の生活に於て最も長い期間を占めて居るのである。然るに痛ましき矛盾は單に靈と肉との對立に限らないで、一切の生活方面に於て到る所に難透の矛盾關が横はつて居る。此の難所に面して我等の執るべき態度は、勿論、二元未分以前の第一王國に踵を返へすのではなく、又其は第二及び第三王國の折衷若くは調和でさへもあり得ない。否な斯かる二重國籍を脱して新たに第四の王を仰いで之に仕へ、其王の權威に依つて始めて前二王國の命令の矛盾を解決することが出來得る。第四王國の命令は前二王國の其を超越するが而かも超絶しない、又其と並立しないが而かも其を包容する。包容し且つ超越する所の超容の態度のみが矛盾解決の力を有するのである。

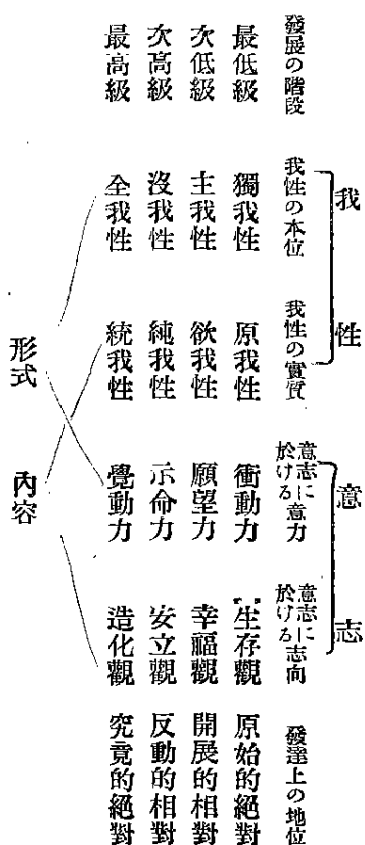
先きに述べたる我性及び意志の發達に於ても明かに四つの王國の變遷を見る。第一王國は獨我性、原我性、衝動力及び生存觀を收むる所の二元未分以前の世界である。其處には靈肉の矛盾もなく勞働と遊戲との區別もなく帝徳を無視して鼓腹擊壤する。二元の分立が始まつて其一が先づ主となりて主我性、欲我性、願望力及び幸福觀を收むる第二王國の時代に入る。然るに其一元が

專横を極むるに及んで他の一元が反動して立ら、沒我性、純我性、示命力及び安立觀を收むる第三王國の時代に移る。然るに反動革命の時代は永續する能はずして、最後に全我性、統我性、覺動力及び造化觀を收むる二元融合の第四王國に到達する。斯の如く我性及び意志を包含する道德心は四つの階段を踐んで順序に發達するものであつて、其々最低級、次低級、次高級及び最高級の地位を占むるのである。尤も斯の如きは單に道德心發達の模型を示したるに止まる。實際には我等が我性及び意志の各階段の間を往復し徘徊し或は墮落することさへある。又現實の行爲に於て各階段に於ける我性及び意志が順序の如く相伴ふとは限らないで、彼此が齟齬し跛行する場合も少くないし、殊に中間の二階段に於て其が著しい。されど其等の故を以て上述せる道德心の發達觀は少しも妨げらるゝことはない。

更に又見地を變へて觀察すれば、最低級及び最高級は孰れも絕對の世界であつて、其處には此の二王國を覆さんとする何等の反對勢力もない。されど最低級は二元未分の原始的絕對界に過ぎないで、早晚、其から相對界に開展し行くべき運命を有する。之に反し最高級は二元融合の究竟的絕對界であつて、結局は其處に相對界を收容する地位に立つて居る。種子が果實と同様なる如く、小兒の無邪氣が聖者の神性に譬へらるゝ如く、最低級と最高級には相通する點があるが、其は孰れも絕對性を有するが故である。されど前者は未發の中であり、基調であり原型であるが、後

者は已發の中であり、極調であり完成である。此の始端と終極との間に立つ次低級及び次高級は孰れも相對の世界である。前者の我性及び意志は後者の其等を豫定して立ち、後者の其等は前者の其等に反抗して立つ。而して前者は内を其まゝに差置いて外に張らんとする、開展的相對性を有し、後者は外を打捨て、内に充ちんとする、反動的相對性を有する。中間の二階段は此の相對性によつて一が他を容るる餘裕なく、互に相爭ひ矛盾を生ずるのである。

斯の如く要するに我等の道德心は、先づ源始的絕對界に住み、次に開展的相對界に進み、更に反動的相對界に移り、終に究竟的絕對界に達し、起承轉結の順路と意味とを以て發達する。今、通覽に便ならしむる爲めに之を圖表に示せば左の通りになる。



II 各發達階段に對する價值判定。

道德心を形成する我性及び意志が上述せる所の階段を疎んじ發達すると云ふことは争ひ難き事實である。吾人は此の事實に對し且つ此の事實に基いて道德的判定を加へんとする。勿論、有無の事實から可否の是當問題を決することは出来ない。茲に事實に基づくと言ふは、次の意味である。

善惡の判定を受ける對象には根本的に出所を異にし左右に對立して相融通することなき二元の我性及び意志なるものは存在しない。否寧ろ道德的對象は一貫の理路を踐んで、必然に始まるべき處から終るべき所に發達し行く。此の「發達」と云ふ事實に對しては、或一階段を善なりとなし、或他の階段を惡なりとなし正反の價值判定をなすことは許されない。たとへば人に就て人格を尊重すると云ふときは其が兒童たり少年たり壯年たる發達の階段の間に價值を異にせざるが如きである。價值判定の立場は存在認明の立場と全く別であるが、如何に價值判定をなすかに就ては判定を受ける事實の特色が判定に影響を與ふるのである。此の意味に於て吾人は道德心の各發達階段に對し凡て之を善なりと判定し、而して各階段に相應して最低善、次低善、次高善、及び最高善の階級的差別を付くるのである。以下尙ほ各階段に亘つて説明して見たい。

最低級に列する獨我性、原我性、衝動力及び生存觀の評價に就ては從來の諸説は頗る曖昧であつて、中には是等を以て善惡の判定に堪えざる無記のものと見る見解も少なくない。されど是等

の行動が單純なる自然的機械的の現象でなく一種の人格の表現である以上は、無記のものとして全く黙殺するは不當である。尙ほ實社會に於ては獨我的行爲や衝動的行爲が他種の行爲と並び存するとき世人は之に道德的批判を加へ、刑法の如きも斯かる行爲に干涉し、又生存權の主張の如きは生存觀が道德論として相當の意義を有することを示して居る。此の點より見ても最低級の我性及び意志と雖も之を道德上の判定に及ばさぬと云ふことは許され得ないのである。然らば此の時代及び意志は善か悪かと云ふに吾人は躊躇なく善なりと判定する。若し之を惡と見るならば小兒や貧民は概して惡人となるべく、人生は罪惡から出發し社會の多數者は罪惡を犯さんが爲めに生きて居ると見なければならぬ。性惡說や原罪說は倫理學說としては善の發生を説明することが出来ない。此邊の問題は深遠なる意味を含んで居るから輕々しく取扱ふことを許されないが、惡の起源を説明し得ないものよりも善の起源を説明し得ないものが道德論としては一層不完全なることは疑ないと思ふ。

從來の多數の倫理學者は次低級に止まる主我性、若くは利己心、願望力、幸福觀、(快樂說としての幸福觀)を否定して、次高級に列する沒我性(若くは利他心)、示命力、人格觀を以て最高善となし中には是等のみをも道德的價值ありと見るやうである。尤も超箇人我として全我を認め、内活動觀又は自我實現說に於て創造觀を採る見解も少くないが、第四段の最高級として第三段より

も異なる一定の我性及び意志を明示せる見解は普通の倫理學書には未だ見當らないやうである。

吾人は此の最高級に達せる道德心たる全我性、統我性、覺動力及び造化觀を以て最高善なりと斷定する。是等は究竟的絕對性を有し道德心の極調であり完成であるから少しも善の缺乏がない。

無缺の善のみが善であると見るならば如上の我性及び意志が唯一の善となる。然らば何に由つて斯の最高善を立つるかと質さるゝならば吾人は唯だ次の如く答ふる外はない。道德論の範圍に於ては、吾人が第四段の我性及び意志に思ひ到るとき、吾人は其を以て行動すれば善價値の實現に於て何の缺ぐる所なしと信じて満足するからである。

若し我等が最低級の道德心より一躍して最高級の其に到達し得るならば、複雑繁瑣なる多くの道德論は凡て無用に歸するであらふ。小兒の笑顔と偉人の威容との前には何人も心胸を開かざるを得ざる如く、最低級と最高級とは未發と已發との差別あるも中道たるは同一であり、基調と極調との懸隔あるも絕對性たるに於ては同一の進路の上に立つて居る。されど自然が飛躍せざる如く道德心も跳騰し得ないで始終の一路は必しも平安でない。然らば何故に最低善と最高善との中間に於て次低善及び次高善を現する所の第二段及び第三段の二つの相對界が介在するか。蓋し我等が第一段の混沌未分の状態より進出する際には先づ簡體を養ひ之を固むる必要がある。而して物體が固まる際には外部より内部へと固まつて行くが如く、簡體的自我にありても柔軟なる内部

を保護する爲めに先きに外部の環境を好良ならしめんとする。此の要求に應じて道德心の内容としては欲我性及び幸福觀が生じ、之に相應する道德心の形式としては箇體的集中に偏する主我性及び願望力が現はれて來る。斯の如くにして外部の固めが出来上つて來れば、次ぎには内部を固むる第三段に移つて行く。此の要求に應ずる道德心の内容は純我性及び安立觀であるが、此内容を充實するには、一應、先入者たる欲我性及び幸福觀を打切るを必要とし而かも其は甚だ難業なるが故に、之を斷行せしめんが爲めに道德心の形式として沒我性及び示命力が與へらるゝのである。而して此の沒我性及び示命力は道德心の發達階段に於て極めて重要な且つ微妙なる作用を演ずる。即ち此の形式は一面には上述の如く欲我性及び幸福觀を退治しつゝ、他面には純我を現せしめ安立に導くのであるが、更に其の奥底に於ては沒我性に由つて箇體我が偏狹なる圍中より解放せられ全我性の前庭に誘ひ行かれ、示命力に由つて小我の自發的要求たる願望が彈壓されつゝ漸次に大我の自發的要求たる覺動に高められ行くのである。尙又、沒我の下に己が純我を明かし示命の下に自ら安立を求むると言ふは一見撞着するが如く思はるゝが、其實は自覺されたる純我は箇體我にして而かも全體我に相即し、又體得されたる安立は箇體我としての其なれど而かも安立すると云ふことは全體我と箇體我との關係が確定されて全體我に於ける一定の地位を占むることを意味する。如上の諸點に於て沒我や示命は普通に考へらるゝ如く永久的價值を有するも

のではないが、道德心の發達上、必ず通過しなければならぬ所の極めて意義深き嚴肅なる階段である我等は其の洗禮を受けたる後始めて最後の究竟階段に上はり得る資格を與へらるゝのである。

我等の道德心は如上の理由にて發達し行くものなれば、孰れの階段と雖も凡て善であつて反價值としての惡と見ることは出来ない。又實際に於て低き階段に居る者はより高き階段に於ける道德心を充分に了解すること能はず、従つて其を惡なりと批判する力も有しない。例へば主我、欲我、願望、幸福の階段に居る者は沒我、純我、示命、安立の我性及び意志に對して其等の實在又は威力を疑ふも敢て惡なりと斷定する勇氣なきが如きである。されど之と異り、己に高き階段に居る者は自ら善なりと許し、又より低き階段に於ける道德心を了解し得て之を惡なりと批判する傾向がある。之れとても自ら立てる高き階段が何處より如何にして來れるかに思ひ及ぶときは、下級の惡も反價値の惡でなく單に自ら許せる善に比して缺乏せる善に過ぎないことを悟るのであらふ。殊に第二段と第三段とは全く反對の方向を執るが如く考へらるゝが故に、前者は後者を空想となし奴隸道德と呼び、後者は前者を世にも淺ましき迷妄邪惡のやうに批難する傾向がある。されど此の二者は決して永久に左右に別れ行く両端でなく、孰れも必然に辿り行くべき前後の道程であつて、唯だ其の踏む所の國土に開化の階段の差あるに過ぎないのである。

之を要するに道德的判定を受くる我性及び意志は四つの階段を踏んで漸次に發達し、其各階段は順次に、より高き善價値の實現と見られ、最終階段に至りて始めて完全無缺の善となる。比較上低き階段は根本的には惡でなく單に善の缺乏に過ぎない。但し我等が醉生夢死して高き階段に上ばることを懈怠し、甚しきは懈怠を過ぎて現に立てる階段より一層低き所に墮落し、或は高き所あるを知らず低きに居りて己に至れるものと迷信し、甚しきは迷信を過ぎて低き所に居りながら高きものを曲解して之を誹謗し、従つて我等が或る善價値の階段に立つて行動することを要求せられ居るに拘らず其以下の階段に至つて行動するならば、其は自づからなる善價値の缺乏でなく、殊更に自身に善價値の缺乏を確認することとなり、其だけ道德上の重い責任を負はなければならぬ。(未完)